

探検・探査

創刊号

1992年11月

横浜市立大学 探検・探査の会

探検・探査の会 会報誌

— 目次 —

第一回「探検・探査の会」交流会によせて	会長 大野正夫	… 1
「探検・探査の会」の今後の運営について	幹事長 小森享二	… 2
’92 天山山脈トムール峰登山隊報告		… 3
雪崩	田村康一	… 4
キャラバン日記	稻田 俊	… 6
寄稿文		
キリマンジャロ・ハネムーン	大槻英二	… 9
インドヒマラヤ ストックカンリ峰遠征記録	宮崎捷二	… 11
僕の「探検」	小林 剛	… 15
今年の学祭について	穂積拓夫	… 16
探検・探査の会 発足によせて	児玉 亮	… 17
自分と探検部	佐藤栄宏	… 18
会員紹介		… 19
幹事の紹介		… 21
探検・探査の会 発足の経過（年表）	川尻哲夫	… 25
探検・探査の会 会則		… 27
探検・探査の会 会員名簿		… 29
編集後記		

第1回「探検・探査の会」交流会によせて

会長 大野正夫

探検部のOB会「探検・探査の会」を作ろうと、有志が集まり会合を持ったのは、3月末がありました。それから半年、何回か会合を持ち、やっと1回交流会にこぎつけたことを、大変うれしく思います。私は遠方よりエールを送っていただけでしたが、まだ若い幹事達の努力に感謝致します。今回は、トムール隊の報告・慰労会でもあります。残念ながら、登頂になりませんでしたが、報告を聞くと、かなりあぶない目にあっており、御苦労様でした。

この原稿を書こうと思っている時に、今までにないハードカバーの進交会の名簿が届きました。同級、先輩、後輩の名前を見つけて、昔の思い出でにふけりましたが、旧職員の名前に、福島 博先生の名前がなく淋しく思いました。何かの手違いとは思いますが、探査会の産みの親であり、探検部の前身時代には大変お世話になりました。私の名前も見つけ、所属をみたら、"生物、福島"研究室が抜けており、"探検"とクラブ名だけ書いてありました。「それもそうだなーと」、思わずうなづきました。探検部卒業の方が、実感が沸いてきます。私の恩師は、福島先生のほかに、「君達はーー」が口癖であった丸山さん、「おめーら」といつも言われた伊東さん、機関銃のようにちゃべった寺島さんかも知れません。横山、松橋、後輩の大貫、木村、宮崎、河合などが良き友でした。

人生の路を付けたのは、探検部で得た"ほとばしり"でした。探検部の後輩の鈴木宏尚君は、国際協力事業団の課長をしており、時折雑談をしに行くのですが、「大野さん、国際協力の仕事は、探検精神ですよー」と言われ、どう結び付くのか考えましたが、彼もまだ懲りずに、がんばっているなど嬉しくなりました。しかし最近、教え子が、私の背をみて育つわけでもないと思いますが、つぎつぎと青年海外協力隊を志望し、少々気が咎めています。両親が尋ねて来て、「先生の説明を聞いて安心しました」と微笑む母親に、「ああーまた悪いことをしてしまった」と後悔しております。探検精神は、あまり誇ることではありませんが、つい、「今日日本に必要なものは、バイオニア精神、探検精神ではないかと、口走ってしまいます。探検・探査の会は、こんなわけのわからないことを聞いてくれる者の集まりであってほしいと願っております。

行方不明者をこれから探し、年に1回でもどこに集合する機会を作ってゆきませか。

「探検・探査の会」の今後の運営について

幹事長 小森享二

去る6月中旬、トムール隊の壮行会を兼ねた幹事会を開催した折、「トムールが終わったら、あとは当面やることが無さそうだ」という言葉を小耳にはさみました。トムールが当会を設立するきっかけではあっても目的ではなかったはずです。会員の数も現役部員を除いて50名を突破し、組織固めもほぼ終わり、そしてトムール隊を送り出し、さあこれからだ!!と思った瞬間、当会運営に関する具体的構想がなにもないことに気がついた訳です。そこで、9月26日に行われた幹事会に於て当会の今後の進め方について話し合いました。以下がその内容です。(あくまでもアイデア、構想の段階でまだ検討が必要と考えます。)

まず、具体的な組織活動を生み出すテーマ・グループをつくること。

①中央アジア研究会(仮称、今までの天山山脈を中心とした活動を足がかりに更に継続的に探検活動を推進していくことを目的としています。今年の夏のトムール峰登頂は成りませんでしたが、来年の夏に引き続きトレッキング・レベルの活動を計画しています。)

②フィリピン群島研究会(仮称、フィリピンは1960年代から現在まで海外探検のフィールドとして多くの部員が活動したとりわけ縁の深いところです。とにかく今までの25年間に亘る活動をまとめてみようという声も上がっています。若き日に熱い思いを馳せたフィリピン群島を再訪してみたいと思っている会員も少なからず居られると思います。)

③野外活動研究会(仮称、現役部員会員とOB会員が共に活動し、世代を超えてお互いに学びあう場を持つというのが主旨です。一番古い会員は既に大学を卒業して30年以上になります。社会においては相当なエキスパートですから若い方々にとっては貴重な知識、技術を得られる絶好の機会になるでしょう。フィールドは国内で、手軽に行けるところを予定しています。)

④横浜市大探検部活動史編纂委員会(仮称、過去10年毎にエキスペディションⅠ、Ⅱ幻?、Ⅲと発行されてきましたが、探査会学生部が生まれてから今まで通じて活動の歴史はまとめられていません。近い将来発行されるであろうエキスペディションⅣの準備の為にも活動の歴史をまとめてみようというのが動機です。)

以上、四つのテーマ・グループの構想が出ました。これらは主に中年会員からの提案で、それに関して若手の会員から形から入るのもいいが、それよりも形に捉われないで、会員が自由に集い話し合うところから自ずと活動の芽が生まれてくるという意見がありました。そこで、まず会員の方々が集まれる場所を確保しなければなりませんが、当面は高松さんのご尽力により大学内の施設を使わせてもらえるとしても将来的には不安が残ります。いろいろ考えた末、一度、学外で会員が自由に集う会(定例会)を開いてみようということで話がまとまりました。開催時期については新年会(すぐに飲み会に結びつけるのも困り者ですが...)を兼ねて来年1月下旬にやろうということになりました。期日が近くなったら案内をお手元にお届けしますので気軽にお集まりください。

当会の運営について取り留めなく述べてまいりましたが、まだまだ先は長いわけで、余り力まず肩の力を抜いて当会の名称(略称)「探々会」らしく淡々と進めていきたいと考えております。今後も会員各位の絶大なるご協力を切に期待する次第です。

92 天山山脈トムール峰登山隊報告

今夏、探検部と山岳部を母体とする登山隊が、一昨年につづき、天山山脈の最高峰トムール(7,435m)に挑んだ。前回の雪崩による遭難事故の教訓から、入山を約1カ月はやめ、核心部の雪壁の安定した時期をねらったが、登山活動なればの7月15日、C2(5,100m)が雪壁からの大規模な雪崩におそれ、高所装備の大半を紛失するという打撃をうけた。

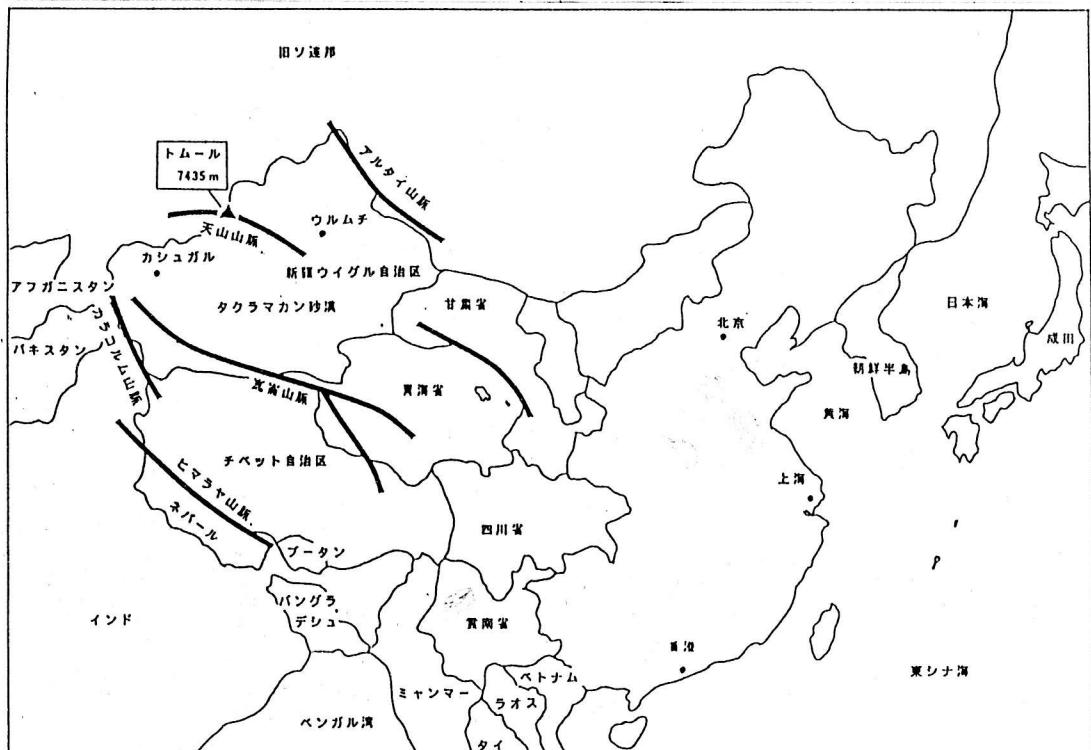
その後、のこった装備をあつめ、小人数によるアルパインスタイルで山頂をめざしたものの、悪天にはばまれ、22日、登頂を断念してBCへ下山した。

なお、登山隊報告書は現時点では完成していないため、後援団体である探検探査の会への中間報告をかね、会報への寄稿をおこなった。(田村)

92 天山トムール峰登山隊隊員

隊長	吉田宣明(27) 山岳部OB	副隊長	田村康一(25) 探検部OB
輸送	佐藤修史(24) 探検部OB	装備	吉見敦司(21) 探検部4年
食糧	稻田俊(20) 探検部2年	記録	真庭博之(23) ワンゲル4年

トムール峰概念図



雪崩！

1990年卒 田村康一

7月15日、雪壁核心部のルート工作をまかされたわたしと稻田、真庭の3名は、翌日の国境稜線への突破を目標に、C2(5,100m)いりした。その前日に隊長の吉田が足を負傷し、佐藤、吉見につきそわれてBCへくだるというアクシデントはあったものの、まだ日程的には充分余裕があり、天候も安定していたため、先のみとおしはあかるかった。一昨年3人が遭難した雪壁をまのあたりにしたわたしは、なんともいえない緊張感とともに、闘志がふつふつとわきあがってくるのを感じていた。

C2に到着したころはまだ陽がたかく、ムシ風呂状態のテントをきらつた稻田と真庭は、雪上にツェルトをはって陽よけをつくり、すずんでいた。わたしは一人、テントのなかであつさをこらえて横になっていた。C2のテントは、稜線への突破をスピーディにはかるため、一昨年にくらべて200m程上部にある雪壁基部の雪原に設営してあった。下のほうでは、あいかわらず雪崩や落石の音がひびいていたが、めざす雪壁の状態は安定しており、ここ数日間は降雪もなかった。わたしは、テントのなかで、いつしかうとうとしはじめた。

突然、稻田の発した「雪崩！」という声にねむりからさめ、テントをとびだすと、雪壁の5,800m地点、ちょうど一昨年の遭難現場のあたりから、轟音とともに雪崩が落下してくる光景がとびこんでくる。高所特有のすいこまれるような藍色の空に、真っ白い雪煙のコントラストが目にやきつく。つぎの瞬間、「にげろ！」さけんだわたしは、雪壁と反対側の斜面にむかって、一目散にかけだしていた。

はしりだしてから、ツェルトでねていた真庭のことが気になり、うしろをふりむくと、雪崩がさらに勢力をまし、加速度をつけてこちらにせまってくるのがみえる。真庭の姿はすでになく、にげだしているのだろうと解釈してまたはしる。

「ドーン」という音にもう一度ふりかえると、雪崩は雪壁の基部に猛

烈ないきおいでたたきつけられ、数百メートルはまいあがった雪煙がさらにわれわれにせまる。「もうだめだ」と観念したとたん、すさまじい爆風にまかれて視界がきえ、無数のブロックの破片が体にぶつかってくる。ふきとばされないように足をふんばって必死にこらえるが、呼吸ができなくなり、意識がとおざかる。

それから1分、2分も経過しただろうか、次第に風がよわり、視界がひらけてきた。なんとかたすかったかもしれない。前方をみると、10m先に稻田がうつぶせになってたおれ、真庭はさらにその先のちいさな穴に、頭をつっこんでいた。稻田がむっくりとおきあがり、意味不明の奇声を発した。真庭は放心状態で、肩でおおきく息をしている。どうやら2人とも無事だったようだ。

ふりかえるとC2はあとかたもなくなつており、雪原には無数のブロックが散乱していた。われわれはテントから100m以上ははしったようだ。雪壁には雪崩の通過したあとが生々しくのこり、雪崩の起点とおもわれる5,800m地点の雪壁は、おおきくえぐりとられて岩肌が露出していた。どうやら、一昨年とおなじく、好天による気温の上昇によって、雪壁が崩壊してブロック雪崩をおこしたらしい。

わたしはテントから裸足にTシャツでかけだしたために、ブロックの破片がぶつかった手足から出血していたが、他の2人はテントシューズをはいており、たいした怪我はなかつた。

稻田と真庭は、雪原上を犬のようにさがしまわり、登山靴や登攀具など、比較的おもく、とおくにとばされなかつたものをほりだしてきた。わたしの靴もみつかり、とりあえず凍傷はまぬがれた。しかし、テントは回収不能な数百メートル先の斜面にひっかかっており、シュラフ、ヤッケ、マットなどは、どこまでとばされたのかわからない状態であった。

われわれは回収した装備をデポし、体勢をたてなおして再度チャレンジすべく、C1にくだつたが、雪崩による物心両面のダメージはおおきく、事実上、この一撃によってトムール峰の登頂は夢ときた。

キャラバン日記

すぐる

探検部2年 稲田 俊

ゆっくりと穢やかに降る雨は「服に侵み込め、体に侵み込め」と言っているかのように降り続けていた。僕は何故かポンチョもかぶらずセーターを濡らしながら歩いた。

「やべえよ、このままじゃ」そう思いながらも、僕の思考は依然夢の中を浮遊しているかのように曠げであった。体も頭の中身と同じようにふらふらとしているが、足だけが、一番状況を把握している自分とは違う存在として、一步一步と僕を前へと運んでいる。口に出したら現実となってしまうのを恐れているのか、誰も何もしゃべらず歩き続けている。雨が雪に変わりつつある。「やべえよ」そんなのは皆わかっているんだ。

昨夜から降り続けていた雨も上がり、3,100m地点の天場で僕らは晴天の朝を迎えた。空の色は普段見慣れた青さよりも少し濃い色合いをしていた。遅くとも今夜にはBCに入りたいので、吉田さんら6人が先発隊となってモレーン地帯を進み、僕と田村さんが荷を積んだ馬を率いてその後を追う。少しでもそれがスムーズにできるように昨日岩だらけのモレーンに多少道らしきものを作つておいた。先発隊がその続きをやりながら進むというので、時間的には厳しいBC入りも比較的楽なように感じた。

相変わらず馬方たちの作業は遅く、天場出発が12:00となってしまった。先発隊が出発後2時間半である。彼らにとって10時出発ということは、10時作業開始ということなのかもしれない。モレーンの中に作った道は遠目ではそれと判別し難いものであった。しかし、ケルンがその威力を發揮し、昨日の到達点まではすんなりと行くことができた。だが、ここからモレーンの様相が一変した。起伏が激しくなり、人が通れたとしても60kg近い荷をのせた馬が進むには難しくなった。本来なら僕と田

村さんが先頭に立ち、先発隊が作った道を確認しながら進むはずが、確認しようにもケルン見つからず、次第に二人とも道を見失っていることに気がつき始めた。後ろでは馬方たちが不信そうに待っている。仕方なく、ガレ場を強引に進ませている間、僕らは高台に立ち、ケルンを探す。ケルンらしきものがあったら、そこまで走ってゆき、確認をする。そんな作業を何回繰り返してもケルンは発見できず、どうやら大きく道から外れていると知る。いくらこの辺りの日没が午後の10時頃だとはいえ、すでに5時を回っている。少しでも距離を稼ごうと直線的に無理なガレ場を何回も渡らせたため、馬方たちも話が違うと騒ぎだした。

18時、定時交信で先発隊と連絡を取り合い、応援をよこしてもらうことにする。馬方たちはもはやケルンがないと動かない状態までいってしまった。そのため、僕が馬たちよりも先に偽のケルンを積みながら応援隊との合流地点まで進む。

やっと遠くに赤いカッパを着た吉見さんの姿が見えた。彼らがいる所は割合平坦なモレーンであるので、そこまで馬たちを上げる。応援隊として吉見さん、佐藤さんが後発隊に加わり、先発隊は吉田さんら3名となってしまった。彼らが作った道は平らなモレーンの上にあり、馬も人も楽に進むことができた。しかし、この頃から雨が降りだし、空が曇り、ガスも出始めた。視界は急激に悪くなつた。しかし、道を見失い、肉体的精神的に疲労した僕は、誰かが先頭を行き、率き連れていってくれる道の上を歩いていることで安堵し、もう全てがうまくゆくものだと思った。

2時間程、かなり良いペースで僕らは歩いたが、先発隊の3人に会うことはなかった。辺りはもう薄暗くなつてきていた。彼らはルート工作のため、ほとんど空身であり、ビバークはできない。僕らは定時交信以外にもトランシーバーで電波を送るが、電池が切れているのだろうか、全く応答してこない。雨が雪に変わってゆく。

雪が全ての痕跡を消してゆく。道もケルンも物音すらも。馬を一頭率いて僕らよりもかなり先を歩いていた佐藤さんが、BC手前の氷河の入

口で真庭さんらしい人の姿を見たと言う。その地点を目指し、佐藤さんの案内で進む。相変わらずトランシーバーに反応はない。気温も下がり、皆の疲労は目に見えてわかる。だが皆は歩く。歩いて歩いて彼らに追いつくしかないという事が暗黙の了解となっているかのように、皆黙々と歩いている。

日は既に沈んだ。雪は更に降りしきり、辺りは雪そのものが持つ光りにのみ照らされ、まるで夢の中をふらふらと歩いているように僕は感じた。夢のような現実というのも実際あるものなのだ。

問題の氷河にたどり着き、その緩やかな傾斜を登った。誰かが吉田さんたちの名を呼びだすと、皆もうこらえきれなくなったかのように声を張りあげて名前を呼びだした。僕も彼らの名前を呼んだ。一旦、声にだしたら止めるのが何故か恐ろしくなり、ずっと名前を呼び続けた。

遠くでかすかに声が聞こえた。僕らは更に大きな声をあげ、歩みを止めた。今度は確かに吉田さんの声だった。

(7月2日、キャラバン4日目のモレーン地帯にて)



青空に残雪映え

愛好家集うキリマンジャロ

タンザニアの北東部にそびえるアフリカ大陸の最高峰、キリマンジャロ山(五八九五メートル)は、高山病さえ克服すれば、素人でも気軽に登れる山として、中高年の登山愛好家を中心に人気を呼んでいる。

日本からのツアーも企画されているが、山ろくにあらわるマラング村の国立公園管理事務所でガイドとボーテーを雇えば、簡単に四泊五日を標準とした登頂ツアーを旅立てる。ピッケルやアイゼンは必要ない。

山小屋での生活は意外に快適。富士山頂とほぼ同じ高度のホロンボハット(三七二〇メートル)でも、ポーテーが用意してくれる温かいスープで始まるコース料理にありつけ、トイレ

は水洗、太陽電池で電灯も

ともる。

富士山を平たくしたようなコニード型火山で、ならうかな斜面をゆっくり登っていく。最後の山小屋ギボハット(四七〇〇メートル)から火口のギルマンズポイント(五六八五メートル)までは標高差約千メートルの急坂。約五時間かけて、夜通し登れば、山頂で、ご来光と火口内の氷原が拝める。

(宇都宮支局・大槻英二
写真)



キリマンジャロ山頂の万年雪を目指す登山者(標高4500メートル付近で)



インドヒマラヤ ストックカシリ峰遠征記録

1965年卒 宮崎 捷二

インド北西部、ヒマラヤ山脈とカラコルム山脈とに挟まれた地域に、ストックカシリ峰 (6153m) を主峰としたストック山群があり、5000~6000m級の山が連なっている。この山域は、ジャム・カシミール州ラダック地方に属し、インダス河上流域にある。近くには、シルクロードの中継地として栄えたレーという町が、相変わらずの活気を見せている。

1992年7月22日~8月19日、群馬県高校教職員・インドヒマラヤ登山隊は、ストックカシリ峰に遠征した。デリーより空路レーの町に入り、高度馴化を兼ね数日滞在。レーからは車で南下し、インダス河を渡り約30分でストック村だ。ここよりキャラヴァンを組み、谷沿いに徐々に高度を上げ2日間でBC地点に達する。BCからは2日間で頂上を極めて戻ることができる。

我が隊は、7月31日にBCを8月1日にC1を設営。8月2日、3日、5日、7日の4回に分けて登頂を果した。

帰路はレー～マナリ間の“雲上の道”と呼ばれるルートを、3泊4日をかけてバスで走破、更に2日間を費やしデリーに戻った。

BC設営、そしてC1建設

7月31日(金)、ストックカシリ峰へのBCは、標高4800mのラルツに設営された。U字谷の底だ。ここからは姿の見えない氷河からの、凍るほど冷たい水が流れている。丈の低いエーデルワイスやキンポウゲの仲間が咲き誇る。テントとテントを結んだロープにインド旗・日章旗・隊旗がはためく。

翌8月1日(土)、C1設営のため途中5090mの峠を越える。この峠では、かつてヒマラヤが海の底であったことを証明してくれるウニ・大型有孔虫(貨幣石)・波の化石などが採取できた。更に左手からの斜面をゆるやかにトラバースすると、50分程で氷河の末端部の小さな氷河湖だ。当初はここ(5260m)にC1を予定していたが、



我が隊の現在の力量を考えると、頂上アタックへの距離が長すぎると判断し、高度を140m程上げた氷河上のプラトーをC1サイトと決める。雪をならし踏み固め4人用・10人用の2張りをたてる。ここからは、ストレートに頂上付近にまでせりあがる南雪面と、左手からの南西稜、雪の殆どついていない南東稜が一望できる。

一次隊の6人は、この日そのままC1に残り、翌8月2日(日)登頂に成功した。小生は二次隊・四次隊として2度頂上を踏んだ。

二次隊のアタック行動記録から

★オリオンを背に、黙々と進む★

8月3日(月) 2:00のアラームに起きる。外は満天の星空。すぐ上に張ったオランダ人も起きている。昨夜は寝付かれず。息を静かにすると苦しくなるので、深呼吸の繰り返し。決局眠ったのか否かよくわからないうちに起床となった。今までのうちで、最も頭痛が激しい。じっとしているとそうでもないが、揺すると全体が痛い。

4:11テント場発、ストックカンリのピークを目指して歩き出す10人。小生トップを行く。冷えて硬くなった雪にアイゼンの爪が鳴る、明るく小さな輪が揺れる。振り返るとオリオンの星が上り始めている。前方のやや高いところにチラチラとオランダ組だ。傾斜は徐々にきつくなる。黒々と露岩。

東の空がライトを不要にしてくれる。先頭としてなるだけ踏み跡を選んでゆっくりと歩く。歩きはじめはマスクをせずにいたが、途中からつける。大口を開けて深呼吸を続けても、喉や気管にトラブルは起こらず、O₂吸収が非常によくなり歩くテンポも軽く感じる。頭痛もいつしか無くなっている。ルートがはっきりしているので、途中から各自のペースになる。

★南西稜からピークをめざす★

今にも太陽が出んとす。5:35南西稜の尾根の鞍部に到達。息遣いも荒くカメラをザックから取り出す。静寂の中この雄大さを独り占めだ。雪の斜面が染まってゆく。8分休んで5:43に歩きだす。

尾根ルートは岩や雪がつづく。全面雪が覆っていれば歩き易かろうに。おまけに岩はしっかりと固定されておらず、手掛かりにしても動いてしまうこと多し。ただひたすら歩く。“あそこの岩までだ”立ち止まって短時間呼吸を整える。“よーしあの雪のへり迄だ”また深呼吸。一次隊の刺した赤い目印の旗が雪壁の上縁に有り。てっぺんから賑やかなオランダ人の声が降る。頂上はもう目と鼻の先の最後の雪田に出た。

★冷やかな心、感涙に温まる★

6:35ストックカンリ峰の頂上に立つ。“コングラチュレイシャンズ！”オランダ組

4人が握手を求めて祝福してくれる。石が積まれタルチョが供えられている。ピッケルに隊旗・日章旗・インド旗を結び最も高くなっている雪に刺す。シャッターを押してくれると言う。“サンキュウ”吾も4人を撮る。

6153mに立てど感激が沸いてこない。そう苦しまずに登ってしまったからかもしれない。処女峰でないからかもしれない。小生に遅れて20分、次々に後続が登頂。旗を結び付けておいたピッケルが、風にさらわれて雪の絶壁に消えてしまった。オランダ組はいつの間にか下ってしまった。苦しみ到達した紅一点の伊藤、みんなと握手を交わしながら“ありがとう、ありがとう”と感涙にむせんでいる。こういう場面を見ると、自分も嬉しくなる。9:30最後に隊長がゆっくりと一步一歩高度を確かめるようにして登頂、みんな思い思いに6153mを感じ、それぞれに味わい、そして過ごす。

小生、頂上の石を採取する。360°の景観を充分に満喫すれど山の名前がわからない。みんなの到着を待つ間、風で多少の寒さはあったが、目出帽・オーバーヤッケで防いだ。上空はうすい雲がひろがり陽が笠をかぶる。隊長がもってきた日章旗・インド旗を加え自動シャッターで全員撮影。結局小生は、頂上に3時間42分もいたことになる。

★ 紅茶と共に味わう満足感 ★

10:17ストックカンリ頂上を後にし、登ってきた南西稜を下る。途中、1人がアイゼンの爪を岩の間にひっかけ転倒。3回転ばかりして雪の上で止まる。頭も打たず怪我もなくホッとする。稜線から再び雪の斜面へ。アイゼンをはずしてがんがん下る。日照りと気温上昇で雪がぐずつき、ときに膝までもぐる。11:23先頭の小生C1に着く。氷河上の流れから水を汲み、紅茶を沸かして皆を待つ。

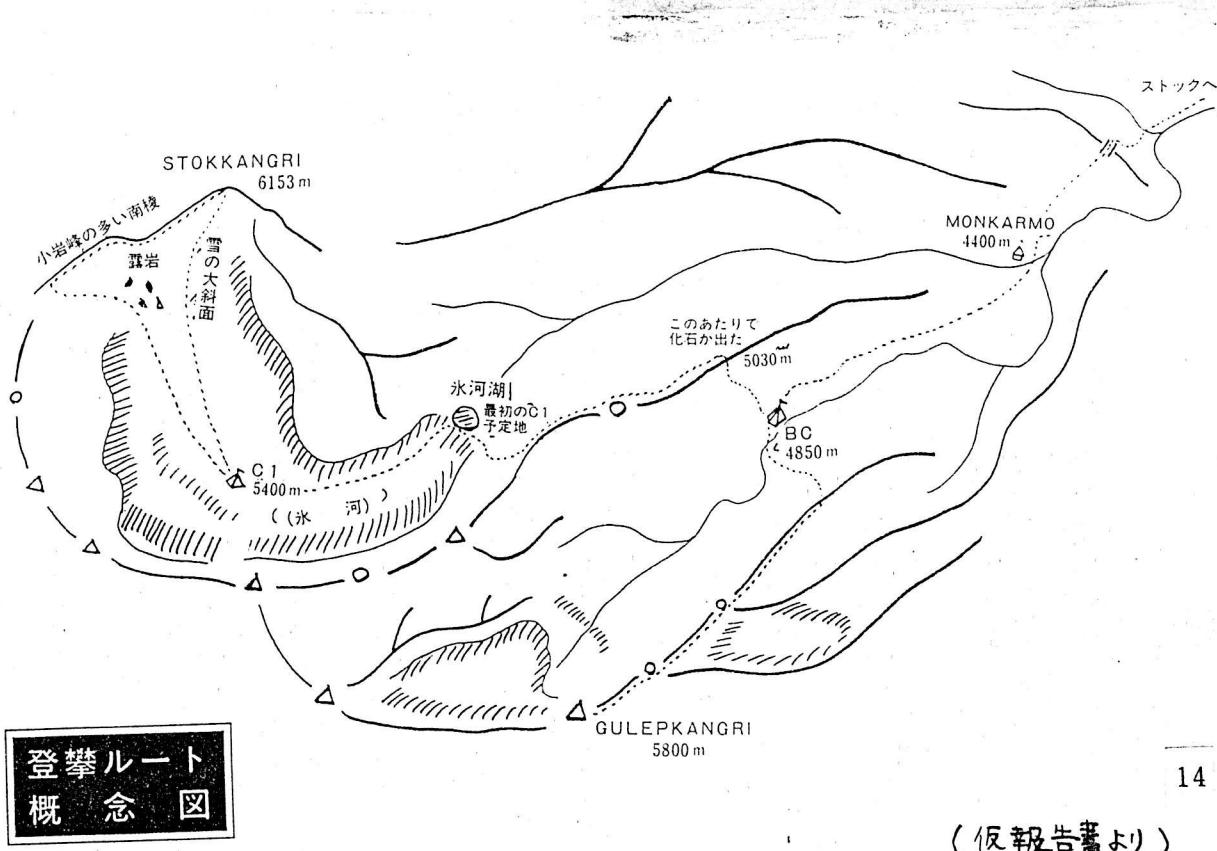
今回の遠征は、小生にとっては、11年前の'80第一次群馬県高校教職員・インドヒマラヤ登山隊トレッキング班(最高5200m)、3年前の'90横浜市立大学天山トムール峰登山隊トレッキング班(最高5000m)に次いで3回目であったが、6000mを越えるのは初めて。隊としては高度馴化のために、筑波大・浅野研究室の低圧実験室内で4000~6000mの高度を経験させて頂いた。これが実際の高度馴化に大いに役立ったと思われる。

また、ストックカンリ峰の雪や岩の状態が極めて良く、ザイルやフィックスロープ等を使わずに済み、アイゼンを必要とした程度であったこと、天候にも恵まれたこと等非常に幸運が重なって、成功を収めることが出来たと思われる。





(ストックカンリ峰 東面5030m付近から)



(仮報告書より)

僕の「探検」

小林 剛

大学に入るまでその存在さえも知らず、部会後に行われた飲み会で、酒の勢いで「探検部」に入部を決めた僕も、入部後半年ぐらいたってやっと「市大探検部」のことを考えるようになった。まず現在の「市大探検部」の活動が「探検部」の名にふさわしくないのではないかと疑問を感じた。現在「市大探検部」で行なわれていることは、登山、沢登り、ロッククライミング、縦走、ケイビング、イカダ・カヌーによる川下りなどであり、それらの活動は「探検」の定義からかけ離れているように感じられた。それらの活動に未知なるものを探ろうとする行為は含まれていない。では今「市大探検部」のやっていることは何か。これはただの冒険でしかない。しかも規模が小さく非常に安全な、本多勝一に言わせればこれはまさに「冒険ゴッコ」である。

では自分は何をやりたいのかを考えてみた。「探検部」にいる自分は果たして「探検」をやりたいのかを自問してみると、実はそうではなく、本当は「冒険」をやりたいのだ。危険に挑みそれを乗り越える、この要求を満たすのに今の「市大探検部」の活動では満足できない。

でもつい最近やっと自分のしたいことは「探検」なのだとわかった。いやむしろ「探検」というより「探険」である。「冒険」、つまり危険を冒すだけなら、猛スピードで突っ込んでくる車の前を横断するのも「冒険」だし、ヤクザを殴るのも「冒険」である。しかしそんなただの「冒険」には興味が沸かない。

「未知」なものに自分をかける。何も「未知」が公の場で「未知」なものでなくてよい。自分にとって「未知」なものに挑む。本などで調べるだけでなく、自分自身の体で「未知」なものを体験する。それが僕の「探検」である。その「探険」に「危険」がともなえば、実現できれば、更に満足のいく「探険」となるであろう。しかし僕の「探検」は今の「市大探検部」の活動だけでは満足できない。確かに今までやってきた活動は僕にとって「未知」なものであり、非常に満足を得た。だがもはや「未知」でなくなったそれを何度もやろうとは思わない。

自分の「探検」をやり自己満足を得るためにには、もっと活動の範囲を広げ、より大きな危険の中に飛び込まなくてはならない。今のままの「市大探検部」の活動で終わりたくない。自分には不可能と思えるような、大風呂敷を広げた「探検」を計画しよう。そして諸先輩方や同級の仲間を引きずりこもう。そしてその「探検」が成功したら更にデッカイ「探検」をやろう。僕の目の前に究極の「探検」などない！！

1992年入学 文理学部1年

今年の学祭について

穂積拓夫

ようやく待ちに待った学祭が近づいてきました。例年11月の始めに行われてきましたが、今年は11月中旬の13~15日にかけて行われることになっています。

今年の探検部は例年どおり、屋外での飲み屋と室内での展示の2つを行います。飲み屋の方では、昨年OBの方々に5万円ももらひながら3万円を超す赤字を出したのを反省し、当初は赤字0を目指していましたがその前提である客のよく来る場所を確保するということが、一部の保守的な部員の陰謀により早くも失敗に終わり、赤字はまず免れないであろうことが予想されます。もっとも私個人としては、我々自身が楽しめれば赤字がいくら出ようとも構わないと思ってはいます。また今年は、毎年恒例であります炭火焼き鳥、おでんに加え、天山遠征隊員が遠くシルクロードから持ってきたシシカバブー専用の香辛料を使用してのシシカバブーや、もつ煮込みも行うなど昨年以上に工夫を凝らす予定です。

部室から時々発見される古い学祭の写真を見てみると、現在使用しているような運動会等で使われるテントではなく、裏山から取ってきたような木を組んだ小屋を使ってたりして驚かされます。また生きたにわとりをその場で焼き鳥にする計画があったことなども聞いています。そういったおよそ探検部にしかできない、または探検部しかやらないこともぜひ何かやってみたいと思っています。今年はもう時間的に無理ですが、できれば来年あたり探検部でつくった「どぶろく」など出せたらと思っています。

規則では夜8時までしか営業できませんが、探検部は9時以前に閉めることは絶対にありませんので、たとえ時間が遅くなってもぜひいらしてください。

1992年10月29日

1991年入学 商学部2年

探検探査の会発足によせて

児玉 亮

探検探査の会の活動がようやく軌道に乗り始めた。現役代表という立場で設立から関わって来たものとして、会をここまでこぎつけることができたのは、大変うれしいことである。同時に、この会の設立によって、現役の活動が、より密度の濃い、そしてまたより幅広いものになって行く土台ができたと思っている。

この会の大きな特徴として、現役が会員に含まれているということが挙げられる。これはこの会が単なるO B会にとどまらず、探検や探査に思いを寄せる人たちの集まりであるということを端的に示している。

わたしは、探検部を愛するものの一人として、活動やその時代背景は異なるにせよ、青春の一時期を探検部や探査会をとおして探検・探査活動についやした先輩方が、その後どのような人生を送られているのか非常に興味があった。たとえどんな人生を送っていようとそこには探検の精神が生きているに違いない、いや生きていてほしい。そろそろ大学後の自分を考えなくてはならないものとして、探検部員であったことを何かこれから自分に反映させたい、と考えているからであろうか。

幹事の方々が忙しい時間を割いて、精力的に会の設立に力を注いだこと。その結果、50名を越えるしかもほとんどすべての年代にわたるO Bの方々が入会の意思表示をされたこと。これは探査会、探検部が設立から今日にいたるまでいかに魅力的な活動をし続けて来たか、そしてそこに関わって来た人々が探検に対する夢を今もなお持ち続けていることを物語っている。また、すでに“ライトエクスペディション計画”なるものが浮上してきてることを見ても、過去を懐かしむためだけのものとはまた違う先輩方のエネルギーを感じ、勇気づけられるとともに「うかうかしていられない」と思ってしまうのである。

探検部もだいぶ様変わりして来ているが、これを機会に貪欲にO Bの方々からいろいろなことを吸収して行きたい。それが探検部にとっても探検探査の会にとっても大きな発展につながることは間違いないことである。

近い世代のO Bとだけでなく、いろいろな世代のO Bと気軽に研究会を開き、フィールドに出る。それが積み重なって、探検部と会の合同の遠征・調査。こんなことが実現すると、わたしたちはいつまでも探検の夢を追い続けることができることになる。

1990年入学 文理学部3年 1992年度探検部部長

自分と探検部

佐藤 栄宏

私は今年、1年間の受験勉強を何とかきり抜け、横浜市立大学に入学した。日本で2番目の都市であり、しかも港町である横浜での大学生活はどのようになるかとかなり期待しつつ、その大学生活をより充実したものとする部などをいろいろ訪問した。

しかしその結果入部したのは、横浜の自分が持っていたイメージとはおよそ遠くかけはなれた我が部、探検部であった。やはり九州の大分の田舎からでてきたこともあり、興味心を持って都会まで出てきたその興味心が、探検部に向けられたのも考えられないことでもないことであった。

以上のように、かなりありきたりの自分と探検部の関わりの始めを書いたのであるが、探検部に入り、諸OBの方々や先輩の話などを聞き、また探検関係の本を読み自分でいろいろなことを考えるにつれて、ますます、単純にとらえていた探検というものが、何か複雑なもののように見えてきたのである。

入部当初はあれこれと自分にとっては真新しいことばかりで、これからやっていくことはすべて自分にとっては魅力的であり、それらをこなしていくことが自分にとって十分に探検であった。しかし話を聞き本を読み考えるうちに、それだけでは「探検」とはいえないという考えが存在することを知った。確かに納得するところもいくつかあり、自分の行っていることは違っているのかと思うところもあった。が、しかしそれが今の自分にとって全てでないような気がするし、全てにしようとは思わない。よって、今までのようマイペースで自分なりの探検を見つけていきたいと思う。

先輩にとって、自分の考え方は甘すぎると考える方もいらっしゃるかもしれません、徐々に自分の考えもよいほうに変わっていくだろうし、そのためにもあせらず努力していこうと思います。

最近山の本を読み、山に興味を持ち始めました。「探検」に関して「山」は時代遅れであるかもしれません、自分の探検のはじめのステップとして山に行こうと思っている今日このごろです。

1992年入学 文理学部1年

会員紹介

会報各号に10数名ずつ紹介していきます。幹事を除いて、あいうえお順にお願いし、今回お便りをいただいた方です。（順不同）

往復ハガキにお願いした内容は、現況や自己アピール、学生時代のこと、卒業後のこと、紹介したいこと、会でやってほしいこと、自分で今後したいこと、その他 会員の交流や親睦、探検活動にはげましとなるようなこと、など何でもお気軽にどうぞ、と言うものでした。

折井亮夫 さんより 1964年入学

昨年9月13日金曜日に頸髄内腫瘍摘出手術を受け、命と引かえに手足マヒの障害が残り一年間休職、懸命にリハビリをし、主治医の言う「職場復帰は無理！」をはねのけ、”奇跡的回復”で9月に教職に復帰しました。病友や、同僚をもビックリさせました。探検部で養われたチャレンジ精神があったればこそ、つらいリハビリも克服できました。まだ完全な体ではないのであれこれ願望すれども当分はおあずけです。でも、必ず又登山やスキーをやってみせる決意です。

（編集部より 折井氏のご奮闘にただ驚くばかりです。深く敬意を表明いたします。将来目標が実現できるよう、みんなで応援したいものですね。）

大下好憲 さんより 1964年入学

最近年令相応中年太り。気になり自転車にこっている。ロードレーサー。かなり体しまる。やはり下腹は今一だが。早今年2月より初めて7000km走破。

昔思い出し「頭はもう少し」だが「身体は丈夫だなあ」と言われたのを。健康一番知力も大事だろうが身体が基本。今更ながら最近とくに痛切に感じる。

大槻英二 さんより 1985年入学

1989年3月に卒業後、毎日新聞に入社して宇都宮市局勤務4年目。3年間の警察回りを経て、現在は県政、市政、遊軍、大谷、教育担当の5つの肩書きをもつ何でも屋です。

栃木県は、日光、那須に那珂川、渡良瀬遊水地と探検活動には恵まれたフィールドが身近にあります。県内に立ち寄った際は、ぜひ一声かけてください。一緒に遊びましょう。

小島広海 さんより 1970年入学

特にありません。（編集部より お便りですのでそのままのせます。）

鳴原佳子 さんより 1982年入学

私の現在の生活は、探検とは ほど遠いので、仕事や日常の雑事をこなしながら探検活動や冒険をしている人の、エネルギーには、敬服するばかりです。

探検・探査会の活動については、宇宙時代にふさわしい、広い意識に基づいたものが出来れば…と思います。

人々との交流がたくさんありますように…

自然と調和したものでありますように…！

小山 博 さんより 1974年入学

今年4月より定時制高校（都）に変わりました。毎日が探検です。
それなりに楽しくやっております。

大江達彦 さんより 1964年入学

大阪市立工業研究所 生物化学課に勤務しております。卒業以来ひたすら微生物相手に仕事をしていますので、探検や山登りには縁遠くなってしまいました。

昨年、宮崎、河合、高松先輩とお会いし天山探査の話を聞き、体の動く内に西域へ入ってみたいと考えるようになりました。

「探検探査の会」の活動経過

文責：川尻哲夫

- 1990年 11/10 (土) 探検部現役による天山事故報告会及びO B会結成についての呼びかけ < O B 6名参加 >
- 1991年 1/26 (土) 会則の骨子検討 < O B 5名参加 >
- 4/20 (土) 発足式流会（準備不足、現役作成による会則の不十分さを指摘のうえ、正式の会則作成に力を注ぐことを確認する） < O B 11名参加 >
- 5/25 (土) 会則原案（河合作成）の第一回検討及び会の名称等 < O B 6名参加 >
- 6/22 (土) 会則草案の検討、発起人会について < O B 3名参加 >
- 7/27 (土) 発起人会準備、総会までの日程検討 < O B 5名参加 >
- 9/22 (土) 発起人会開催 経緯説明、会則の検討、総会の準備（発起人30名） < O B 8名参加 >
- 11/16 (土) 総会準備、案内文書検討 < O B 3名参加 >
- 12/28 (土) 「O B会設立のお知らせ」を全探検部O Bに発送（挨拶文、会則案、会則等の補足説明、名称募集、総会案内）
- 1992年 2/15 (土) O B会総会開催 < O B 名参加 >
- 決定事項 名称：「横浜市立大学探検探査の会」
会則：準備会での草案を承認
会長：大野政夫（1959年入学）
幹事長：小森享二（1968年入学）
幹事：12名 会計監査：2名
- 3/19 (木) 大野会長と幹事3名が横浜にて会合

3/28 (土) 幹事会 (1) 勧誘活動への注力を確認
<会長はじめO B 参加>

5/16 (土) 幹事会 (2) O B会発足の再度の通知方法について、
文書作成の分担等
<O B 名参加>

5/23 (土) 「探査会」理事会開催 (事実上の解散を決定)
~~・実行~~

6/13 (土) 幹事会 (3) 文書原案の検討
「トムール隊」壮行会 <O B 名参加>

7/1 (土) 「O B会発足のお知らせ」を全探検部O Bに発送
入会への意志の最終確認

9/26 (土) 幹事会 (4) 交流会準備
入会状況確認 (入会O B 51名)
<O B 名参加>

11/23 (月) 事前打ち合わせ会 (逗子マリーナにて)
交流会準備 <O B 3名、現役1名参加>

11/28 (土) 交流会開催

横浜市立大学探検・探査の会 会則

(名称)

第1条 本会の名称は探検・探査の会とする。

(目的)

第2条 本会は「地球の自然」と「人間の文化」を愛するものが、世代や分野を越えた相互協力を通して未知の領域を求める探検の諸活動を行うことを目的とする。

(事業)

第3条 本会は前条の目的を達成するために次の事業を行う。

- (1)探検活動の主催及びその援助
- (2)探検に関する情報交換及び研究活動
- (3)会報の発行及び探検報告活動
- (4)会員相互の交流、親睦
- (5)その他、本会の目的達成に必要な活動

(会員の構成)

第4条 本会は、本会の主旨に賛同する横浜市立大学探検部OB
(旧探査会学生部を含む) 及び現役の探検部員をもって構成する。

(入会)

第5条 本会に入会するものは申込書を提出し、所定の会費を納入するものとする。

(運営組織)

第6条 本会は運営のために次の幹事で構成される幹事会をおく。

- 1.幹事は会務一般を行い、総会で選出するものとする。
- 2.次の役職については幹事の互選により選出するものとする。
 - (1)会長は1名とし、会を代表するとともに会務を総括する。
 - (2)幹事長は1名とし、事務を総括する。
 - (3)会計幹事は1名とし、会計事務を総括する。

(4)会計監査幹事は2名とし、会計監査を行う。

3.幹事の任期は原則として1年とする。ただし、再選は妨げない。

"会計年度に入れる"
2
4/1~3/31まで

(会議)

第7条 会議は総会と幹事会からなる。

1.総会は本会の最高議決機関であり、定期総会と臨時総会からなる。

(1)定期総会は会長の招集により年1回開催する。

(2)臨時総会は幹事会が必要と認められた場合ならびに、会員の5分の1以上の請求があった場合に開催する。

(3)総会は委任状を含む会員の3分の1以上の出席で成立する。

(4)総会においては会則の改廃、活動方針、予算、決算、その他の重要事項を議決する。

2.幹事会は総会に次ぐ議決機関であり、必要に応じ会長が招集し、幹事の過半数の出席で成立する。

3.会議の議決はすべて出席者の過半数でこれを決める。

(運営費用)

第8条 本会の運営費用は会費、その他の収入をもってこれにあてるものとし、会費は年額 2000円、学生はその半額とする。

(資格喪失)

第9条 会員は次の各項に該当するときは、その資格を失う。

1.退会の意思表示をしたとき。

2.2年以上会費を滞納したとき。

(雑則)

第10条 1.会員が本会の名称を用いて探検活動を行うときは事前に文書をもって計画案を幹事会に提出し、幹事会の承認を得なければならない。

2.本会会則にない事項は幹事会と総会の議決を経て別に定める。

トムル後 俊彦

4月~3月31日